

釧路湿原自然再生協議会 再生普及小委員会
第11回湿原学習のための学校支援ワーキンググループ議事録

日時：2020年9月11日（金）15:30～17:00

場所：釧路地方合同庁舎 7階 第5会議室

※WEB会議併用

【出席者（敬称略・順不同）】

<専門家>

- ・高橋 忠一（再生普及小委員会委員長）
- ・境 智洋（北海道教育大学釧路校 教授）【オンライン参加】

<学校教員>

- ・釧路町立別保小学校 瀬野 明奈【オンライン参加】
- ・鶴居村立幌呂中学校 長谷 泰昌
- ・釧路湖陵高等学校 池田 耕

<学校教育行政機関等>

- ・北海道教育庁釧路教育局 義務教育指導班 指導主事 佐々木 慶典
- ・釧路市教育委員会 学校教育部 教育支援課 指導主事 畠山 和彦、関本 裕介
- ・標茶町教育委員会 指導室 指導室長 秋山 豊【オンライン参加】
- ・環境省北海道地方環境事務所 釧路自然環境事務所 自然再生企画官 瀬川 涼

<ワーキンググループ事務局>

- ・環境省北海道地方環境事務所 釧路自然環境事務所 自然保護官 瀧口 さやか
- ・公益財団法人北海道環境財団 山本 泰志、安保 芳久、安田 智子

事務局 第 11 回湿原学習のための学校支援ワーキンググループ（以下 WG）を開催する。

（配布資料の確認後、出席委員より自己紹介）

以降の進行を高橋座長に願います。（以降、高橋座長により進行）

議事 1 第 10 回ワーキンググループ会合以降の取組み

事務局 資料 1 に基づき説明。

高橋座長 学校を対象として学習に役立つこととして行われた事と、先生に興味を持っていただくための活動について報告があった。別保小学校のフィールド学習の様子を 5 分程度の動画で用意しているので、ご覧いただきたい。

（動画を視聴）

高橋座長 別保小学校のフィールド学習の様子をご覧いただいた。当日の学習内容や子どもたちの様子を教えていただきたい。

瀬野委員 子どもたちは実際に湿原を見て、すごく楽しかったということが大きな感想だった。実際にそれが釧路町にあるということに喜びを感じている子どもたちがとても多く、自分も新しい勉強になった。この湿原の学習を終えてから、子どもたちは調査に入っている。この学習は、歩く、試すという題名を付けさせてもらっているが、子どもたちが実際に歩いて見たことに対して、これから試していくということを必ず入れてくださいとお願いしている。例えば、ヤチマナコ、ヤチボウズ、竪穴式住居、湧き水、動物や虫の生態について調べたいと言っている子が多い。ヤチマナコやヤチボウズの構造を調べて実際にミニバージョンを水槽で作ったり、ヤチボウズの断面を切ってみてみたいということを言っている。竪穴式住居の穴が斜めの土地にもあり、どんな風に斜めの場所に家を建てていたのか興味を持った子は、実際に斜めに土を盛った所に竪穴式住居のミニ模型を作りたいと言っている。湧き水を再現してみたいとか、川がどこにつながっているのかマッピングしてみたい、動物や虫の生態を調べて体の構造を調べるために紙粘土で作ってみたい、ツルの巣を再現してみたいという子もいた。このように、一つのテーマに対してマインドマップを作り、はじめに、予想、仮説を立て、インターネットで調べるところまで現在学習を進めている。これからボードにまとめていくが、それに向けて子どもたちはとても楽しく調べていて、これから一人一人の試すという部分に入っていくところになる。

高橋座長 フィールドに直接出向くことによって、子どもたちの感性や感受性が目覚める、学習へのきっかけが出来るといった例として別保小学校の事例をみた場合、どのような感想を持たれるだろうか。

池田委員 湖陵高校の子は、理数科 1 クラスで湿原に関係した取組みがあるが、高校生になっても釧路湿原に足を運んだことがないという子も少なくない。一步踏み入れて実際に触ってみるという体験をしたことがある子も恐らく少ない。地元にある環境資源を上手く活用できていないという実感もある。1 日だが湿原に行ってみて、今は実感を持って研究してみたい、考えてみたいという取組みもあったので、小学校のうちからあのような取組みをして、しかも探求的にやられているということは凄いと感じた。そうした学習が広がって行って高校まで来ると、少し違う世の中が広がってくるのではないかという感想を持った。

高橋座長 小学校の子どもたちの姿だったが、中学の先生から見た場合にどのように感じるか。

長谷委員 小学校であそこまで体験的に行っていると、中学校にあがり探求的な学習を行った時やレポートなどの活動に入った時に円滑に進みそうだと感じた。総合的な学習の時間では、鶴居村ではタンチョウについて学習を行うが、小学校で学習し、中学校でも学習するということになる、インターネットで調べるには限界があり、フィールドに出て新しい生の刺激をもらわないと厳しいと感じる。別保小学校では、ボードづくりまでを行っており、とても良い取組みと感じた。

高橋座長 小学生から中学生、高校生と学校が上がっていった時に、分断されるのではなく継続して一本の線につながっていきけるような学習の仕組みが出来ることが目標の一つになるだろう。そうなれば、自分たちの体験や経験の中から発見したこと、疑問に思ったことを持続して調べたり、聞いたり、教わったりといった動機や関心が広がっていく。それに向けて、どのようなお手伝いができるかということはこのWGではテーマとしていきたい。

教員研修については、今年も秋以降に2回の実施を予定しており、WGの委員、参加を希望する教員、大学の学生などを対象とした研修を予定している。テーマ、内容、開催時期などについてご意見をいただきたい。

佐々木委員 例年とは実施する時期が違うということは、湿原の中で先生方が出会う素材も違うということになる。学校の視点から考えた時に、先生方がそこで出会った素材をどうやって教材化できるかという部分が大切になってくる。先ほどの動画の中で、湧水地の映像があった。先生が研修の中でこういった素材に出会ったとしたら、例えば、小学校3年生の社会科「水はどこから」の学習で、森林は湧水地としてどういった役割を果たしているのかといった学習で活用できる。出会った素材が学校の学習のどういうところとつながっているのか先生達が発見できるような研修の場になると、実際にどうやってこのフィールドを教材化して使おうかと参加した先生達が考えることができ、つながっていくということを感じながら拝見していた。

高橋座長 動画を見ていて、釧路湿原の中で中心に存在しているものは水だと感じた。季節によって水の表情は違って来るが、その都度、それに触れることで、様々なことを感じ取れるように思う。

関本委員 水という一つのキーワードが挙げられたが、私も何回か子どもたちと一緒に湿原でのフィールドワークを体験したことがある。夏の表情と冬の表情は全く違い、当時、子どもたちに四季を通して釧路湿原を訪問して体験してもらいたいという思いがあった。交通の手段など上手くいかない部分もあるが、せめて夏と冬、季節が違う2回のフィールドワークは価値がある。水辺に棲む生物に派生していくことも出来るし、冬は雪に覆われてはいるが、一部分凍結していない場所もあり、それはなぜだろうと子どもたちが自然に疑問を持ち始め、そこから釧路湿原の不思議さ、関わる環境に視野を広げていけるということは、足を運ばないとなかなか気が付けない部分。インターネットでは難しく、現地に足を運ぶ価値がここにあると感じながら行っていた。

高橋座長 厳寒期にも行うことで、湿原の表情が全く夏とは異なる場所に行くことができる。

畠山委員 市内の小学校の実情を考えると体験しに行くことが難しい学校が多いというのが正直なところ。湿原を見に行くことができないという点で、先生方が教材化を断念しているという部分もあるのではないかと捉えている。今後に向けてのヒントになった点は、先ほどの5分から10分程度の湿原についての映像資料が数パターンあり、それを先生方に見てもらい

ながら、教材化する際にどのように生かせるのか、映像を見ながら子どもたちに何を考えさせられるのかといった発信も一つ出来るのではないか。子どもたちが探検をしに行っている姿はより見やすいように感じた。

高橋座長 子どもたちが生き生きして、喜んだり、楽しんだり、笑ったりしている姿を動画で見ることが出来るということは、先生にとって新鮮な感動になるかもしれない。先生が教員研修に参加するかどうかを考える際、屋外は遠慮するという先生もいるだろう。学生も同じで、虫が飛んできただけで悲鳴をあげる者もいる。ひとつ皮がはがれると良いなと感じることは多いが、スムーズに湿原に入っていく道筋が必要で、動画もその一つになる。文章よりは、写真や絵の方が訴えかける力が強いが、動くものを見ることはさらに精神に訴えかけてくるように思う。そうした視点も持ちながら、季節による湿原の違いとともに、子どもたちの表情がこんなに違うのかということのを伝え、研修に参加する先生を一人でも掘り出せるような企画を立てていきたい。そのほかに意見、感想などあればお願いしたい。

瀬川委員 先程みたような動画を見ると現地のイメージが湧きやすい。以前に着任していた場所では、国立公園の中に自然系の博物館があり、学芸員の方がエリアの先生を対象に教員のための博物館という企画を行っていた。私どもも自然観察会などの企画の参考にするため参加したが、最新の知見や、どのように学習に生かしていくかといった話があった。今後は、湿原に行くのではなく、湿原が学校に行くということを考えていった方が良いと感じており、先ほどのような動画も活用していくとよいのでは。

高橋座長 安全に子どもたちを連れて行き、連れて帰るということに関して、バスの手配など交通のことを含めて、先生にとってとても大変な作業になる。やりたいけどもできないという意見も先生から多くいただいている。ならば、湿原が外向いてくる、無理に湿原の中に行かなくとも身近な環境で手掛かりになるようなことを経験するといった工夫を考えていければという意見も出てくる。

学生を連れて冬に湿原の中に行った時に、うっすらと氷の上に積もった雪に足を取られてシカが滑って転んだ跡があった。学生にとってはショッキングなことで、滑った時の状況を想像する。非常に面白がってにわかには前向きになった。また、テントで泊まった時、近くを流れていた川が夕方に音を立てて凍り始める。その音がショックだったと。このように、その場に行かないと経験できないことが思いがけずある。それだけで、ずっと忘れられない経験になる。学校の先生にもそうした経験が得られるような機会を用意できればと思う。

秋山委員 標茶町では去年から町の施策で、小学校の卒業までにカヌー体験をさせることになった。小学校5年生から6年生のどちらかの学年で、塘路湖から細岡まで全員がカヌーに乗ることが始まった。昨年乗った子どもたちの感想を聞くと、普段、車で横から見ていた川とは全く違う姿を見れて感動していた。先週、私も久しぶりにカヌーに乗ったが、目線も違い、空気も違い、実体験のすごさを改めて感じた。標茶はそうした施策が始まったので、何も気にせず普段は塘路湖やシラルトロ湖の横を通り、湿原の中にいるような生活をしていることを何とか学校で結び付けられないかということを考えていた。カヌーに乗った時に初めてすごい価値に気づくが、普段から価値あるところにいるんだよということ、色々な面で意識づけさせられると良いなと思って議論を聞いていた。また、実体験が難しければ動画が効果的という話題があり、その通りだと感じるが、先生方に研修にどう参加してもらうかということもとても難しい問題。若い世代ではSNSを使うことに長けていたり、そこに価

値観を見出したりするので、自分が研修したことを発信して本州の人からすれば素晴らしい地域だといった反応、そうしたやりとりが双方向で出来れば、自分が素晴らしい場所に住んでいて、素晴らしい研修に参加したことの实感が得やすいのかなと思って聞いていた。

高橋座長 標茶町は、湿原が身近にある場所の一つ。小学生が学校の教育の中でカヌーに乗れるということは他ではないことで、非常に特権的な経験になる。それぞれの地域の中でこういったことができるということが企画の中で出てくれば一番良いと思う。

議事 2 今後の取り組みの方針について

事務局 資料 2 に基づき説明。

高橋座長 5 年毎に活動を見直し次の 5 年間に向けて考えていく。現在、第 4 期のスタートの年にあたる。これからの 5 年間、どのようなことを企画し実行していくか、意見をいただくことが主題になる。9 ページの新たな取り組みについて、1 番から 6 番まで箇条書きで書かれている。1 つめは、小学校、中学校、高等学校における学びの連続性をこれまでよりもはっきりした形で作り出したいというもの。場合によっては、ここに大学が入っても良い。時には大学の先生が小学校に来てお話をしてくださるということもあって良い。双方向での刺激にもなる。2 つめは、学校だけではなく地域と一体となった教育の在り方を求めていけないだろうかというもの。3 つめは、教員の意識への働きかけをどのようにしたらよいかというもの。地域の学校で仕事をしている先生が地域に対して無関心であることは良いことではなく、何かの形で地域に関心を持ってもらう手立てを考えていけないだろうかというもの。4 つめは WEB 環境の積極的な活用であるが、現在、試行錯誤しながら WEB 環境の試みが広がっている。得手不得手はあるが、否応なしに我々は身に付けていかなければならない。5 つめは、映像資料と実物サンプルを組み合わせた湿原の教材化。先ほどの動画にせよ、有ると無いでは大きく違う。実物サンプルを組み合わせて映像資料を積極的に作り上げていくとあるが、こういった試みも今後なされなければいけない。6 つめは、湿原に訪問することは難しいということで、一つの方法として学校の身近な環境を活用した湿原をテーマとしたパッケージドプログラムを考えていくことはできないだろうかというもの。どの番号からでも良いので、ご意見やアイデアをいただきたい。

長谷委員 勤務している学校は小さい学校なので、温根内ビジターセンターまでバスで往復 30 分程度で行ける。総合学習をより良いものにしていこうとしている時期であり、1 年生は鶴居地域で探求的な学習を行うことになっているので、内容としてもテーマとしても当てはまっており、取り入れられればと思っている。今年度はコロナもあり実施が難しい状況なので、今後、取り組んでいければと考えている。

高橋座長 大学でも同様に、非常に神経を使わなければいけない状況にある。一人の感染でも学校にとっては大変なことになり、気を付けなければいけない。コロナが収束した際には取組む上での課題はあるか。

長谷委員 管理職と相談しながら進めていくことになる。隣に幌呂小学校があり、連携できれば継続的に出来るのかもしれない。現在は、小中連携の事業も止まっており、今年度新たに小学校に着任された先生とも面識がない状況になっている。そうした点からも今年度は動き

づらい状況にある。

高橋座長 小学校と中学校が連携していけば、新しい形も見えてくるのではないかと思う。

池田委員 釧路湿原を教材化するという部分で、それぞれの学校での目標があると思う。それを達成するために教材として釧路湿原を利用していくことが一つある。もう一つは、釧路湿原を対象とする学習自体を目的として展開していくことで、どちらを作っていくのかにより状況は異なるだろう。前者については、それぞれの学校課題によって違ってくるので、学校現場に任せることになるだろう。学校教育を通じて釧路湿原の価値をどのように知らせていくのかという点については、形式的に言えば釧路湿原検定のようなものも考えられる。釧路湿原の学習を行い、系統立てて理解度、体験的なレベルを計ることも可能ではないかと思う。そうしたものが求められるのであれば、それらを作る。学校教育の目標に対して釧路湿原を教材化するというのであれば、そちらにも力を入れるということになるだろう。

高橋座長 漠然と考えていたことだが、明確にさせていただいた。例えば、水を学習するにあたって、そのための教材として釧路湿原を利用するということがある。これは、これまでも教材のために資料を作成した際に行ってきたこと。もう一つは、釧路湿原そのものに対する学習。より理解が進んだ方、学習が深まった方を対象として行う。このようにつながっていくための道筋が導けると良い。釧路検定というものがあり、文化的な事、歴史的な事について問題を作成している。釧路湿原をテーマとした検定ということだろう。

池田委員 学びの連続性について、学びは連続がありながらもパッチ状にムラがある。取組んでいる小学校、中学校もあれば、そうでない学校もある。多様な子どもたちが高校に集まってくるが、学習指導要領の上では学習してきた内容は統一されているが、地域学習という点では統一していない。学習をして自分のものにした子が、誇りを持って他の子に教えることができる状態になっていけば、それはそれで良いのではないかと思う。以前にマリモについて勉強した際、阿寒湖中出身の子が、目を輝かせて学習を行ったと生き生きと発言していた。おとなしい子であるが、非常に誇りを持っていた。釧路湿原についても、釧路に住んでいる者として、当然の教養として皆が持っていて、皆に誇りを持って教えたいという状況になっていけば良い。学校毎にムラがあるかもしれないが、釧路市民としての教養として、釧路湿原についての学習や体験のレベルが上がってくると、それはそれで良いのではないかと思う。

高橋座長 自分が知っていること、経験していることに対して、誇らしさ、嬉しさが表れた時に自分が主役になり輝くような瞬間が経験できるということ。教育の中では大切な一つの要素になるかと思う。

佐々木委員 1つめの小中高の学びの連続性を考えた時、ゴールの子ども像をどのように設定するかによって変わってくる。例えば総合的な学習の時間をイメージした時に、湿原の中にある素材をどのように系統立てて学習の中で扱っていくかといった系統性、連続性ということも考えることができる。1つの素材の中でもどこを切り取るかによって違う学習が成り立っていく学習もあるだろう。水や虫、川、植物など湿原の中に素晴らしい素材がいろいろあると思うが、それらをどのように小学校から高等学校にかけて系統立てて整理していくのかということも連続性という部分で考えていくことが出来ると感じた。

5番、6番については、現在、コロナ禍ということもあり、釧路管内といっても範囲が広いということも考えた時に、映像資料というものは一つ貴重になるだろう。例えば、小中学

校での総合的な学習の時間でどのように扱っていくかを考えた時に、課題を設定することが一つのキーになってくるが、その時に大事にすべきとされているのが直接体験。いろいろな制約から実際に行くことができない、見ることができない、触れることができないということが多くある中で如何に直接体験を行うか、そこから課題を設定することで、子どもは探求的に学んでいくスパイラルで偉力が高まっていくと言われている。そう考えると、実際に行けなくとも先ほどのような動画やサンプルが教室にあり触れることができる教材があると、各学校での子どもたちの学びはスパイラルが回っていくのだろう。これが総合的な学習のイメージ。もう一つは、釧路湿原を素材として扱う場合に、先生方はどのような学習を行う時にどんな素材があり、どのように使えるのかといった情報を持ち得ていなかったりする。例えば、川の学習を行う際に川の流れについて実験をしたくとも理科室で行うことが出来ないとしても、湿原の中に流れている川を使った実験、例えば、川の内側と外側で流れが違ふといったことや、このように浸食されているといったことがわかる動画などがあれば、それをどのように使うかということも活性化していくと思う。総合という面と教科の学習の中のどの学年のどの単元とリンクして、その素材が使えるということも示されていると、学校での湿原自体の学びと材料として使うという学びの両面が活性化していくのかなということを考えていた。

秋山委員 連続性のゴールについて、いろいろな事が考えられると感じたが、標茶町としては、学校教育とは別にしたとしても、湿原を通して故郷の魅力や価値に気づき、最終的には故郷を愛することができる、そういう子に育ててもらいたいと思う。教育委員会がどのように湿原を生かしていけるかということ、議論を聞いていて課題として感じていた。1から6までの項目を考えた時、本来は足を運べると良いが、先生方には多くのアイデアがあり、子どもにこのようにことをさせてあげたいということも多く思いつくと思う。一方で、安全面やお金などいろいろな制約があり、出来ないことも多くあると思う。その時に、6番目の湿原に関係する学習がパッケージになっていて、手軽に安全にお金もかからずに信頼できるサポーターとして利用できるのであれば、入り口として非常に効果があるのではないかと思う。これを行うことで興味を持つ教員が増えていたり、一人ではできないことを実現できるということもあるだろう。このパッケージプログラム作成の取組みが少し進めば、何かのきっかけにはなっていくだろう。

高橋座長 連続性のゴールということは考えていかなければならない。

境委員 1つめのことだが、佐々木主事から話があったが、高校での到達点を考えなければならぬと感じる。昨年の釧路湖陵高校で行われたスーパーサイエンスハイスクールの年度末の発表会を聞いてきた。発表会は、子どもたちが探求課題を持って、自分たちが調べたことを発表するという会。その中で感じたことは、探求する課題をどのように見つけるのかということがまだ出来ていないということ。調べ学習で終わってしまっている。調べたことがわかりましたという発表で終わってしまっている。高校になった時には、自分が調べた中でこういった課題が見つかったので、それをさらに探求していくという姿勢に育たなければならないと思っている。そうすると、それを作っていく素地は実は小学校、中学校になる。探求の過程というのは、釧路の弱点だと自分は思っている。小学校での理科や総合での探求の学び、課題を見つける、課題を追及する、自分なりに考察するといったところ、中学校で

はさらに高めていくところ、高校では自分で課題を見つけていき探求できるようになる姿でなければならぬだろう。そうしたことを考えた時に、到達点というのは、高校を目指した時、さらに私たちは大学にいるが、大学の学生を見ても自分の卒業論文のテーマを見つけることがすごく難しい。これは他の大学でも同様。小中高と通していき、探求の姿勢というものをきちんと学んでいくべきだろう。それが、この連続性ということだと考えている。総合や理科の中で、探求の力をつけるためには、湿原の素材というものは良いものであろう。全ての学校で湿原を扱うことはできないが、湿原を使うことによって、そうした力をつけていくんだということ考えていけば良いと自分は思っている。それが学びの到達点にもつながる過程になる。標茶小学校を3年間見てきたが、自分たちで湿原に入っていき、自分で発表していく姿というものが、だいぶ出来上がってきたと感じていた。最初の頃はインターネットから引っ張ってきたものをただ貼るだけという子がすごく多かったが、3年目になった時には自分たちで課題を見つけていた。例えば、湿原の木道が倒れないためにはどうしたら良いのかを考えてみたり、この水はどこから来たのかを考えたり、子どもたちならではの発想があったと思う。そうした部分を大事にしていきたい。

湿原サイエンスフェアを標茶で行っているが、学んだことを発表する場面がとても大切になる。現在、各学校でやったことを発表し合うという姿があると思うが、子どもたちは評価されたいだろうと思う。例えば、釧路町内や標茶町内の全ての学校で発表会があったり、さらに釧路管内全体で研究を発表できる場があったり、その中に高校生や中学生が入って来て助言してくれたり、そうした発表の機会を今後作っていくことが出来れば、釧路が湿原を題材としながらも広がっていく姿を見ることが出来るのではないかと考えている。

5番目の映像資料と実物サンプルを組み合わせた湿原の教材化について、学校では日々忙しいので、教材が欲しくともなかなか作ることが出来ない。本別町の例を出す、現在、小学校と中学校と高等学校が1つになって理科の教材作成を行っている。例えば、小学校で地層の学習を行う際に、高校の先生方が協力して教材を作ってあげて、教育委員会が管理し、小学校に貸し出すシステムを作っている。今後は、小学校で使うような教材、教具を教育委員会がストックしておき、貸し出すようなシステムを作ろうという動きをしている。そういったものが、湿原を使う教材がどこかにストックされていて、貸出を行うことが出来れば、面白いことが出来るのではないかと考えている。

高橋座長 教材のデータベースのようなもの、資料室といったものを用意できれば、小学校、中学校、高等学校と分け隔てなく使っていけるということであった。

佐々木委員 一度整備して浸透すれば、汎用性があるものになると思う。湿原を使ったものがイベントではなく、どの先生になっても学校で継続して行われていくということが大事だと思う。そういう点で、教材をどう整理するのかということは大事な視点になる。

瀬野委員 4番目、5番目についてであるが、子どもたちは現在、探求したいものを見つけて、こういうのを見てみたい、ああいうのをやってみたいと言っているが、自分ひとりで全てやるのはすごく難しいと感じている。例えば、ヤチマナコを再現したいと言っている子どもたちに対して、どうやったらヤチマナコを作れるのか、ヤチボウズの断面図を見たいと、塘路のニタイトで断面図を見たことがあるが、子どもたちを連れていくことは難しく、自分で行きなさいということも難しい。釧路町ではクラスの人数分タブレットが配置されており、全

てに ZOOM が入っている。そういうところで、塘路湖であればヤチボウズやヤチマナコを見れるというところを、生の反応をしながら見ることができるといことが、とても良いと思っている。もちろん映像も良いが、実際に反応しながら見るということは、すごく発見のあるものになるので、そうした部分で WEB 環境を整えていければ良いと思っていた。

6 番目については、今年 5 年生の宿泊研修でネパール厚岸に行く際に、水鳥観察館に行かせていただくことになっている。また、元々 5 年生では学校近くのサンタクンベ川に行って、川でどうやって魚を採るのかということを経験の方から体験させてくださったりしている。そうした体験を 3 つ合わせることで、少しずつ、子どもたちの疑問なども出てきたところが事実としてある。学校のカリキュラムマネジメントではないが、そうした部分で一つ線があると、担任としてもすごくやりやすかったし、見通しを持って子どもたちも体験できてとても良かったと感じている。

高橋座長 先生 1 人では難しいところがあっても、どこかで手伝ってくれる機関があれば可能になると。このワーキンググループはそうした力になればと思っている。企画をいろいろと考えていきたい。話がこれから進んでいく状況ではあるが、時間となった。いただいた意見をヒントにして、新たな取組みを考えていきたい。他に意見がなければ本日はここまでとしたい。以上で本日の議事を終了する。事務局にお返す。

事務局 様々な意見にお礼申し上げます。配布資料のチラシ等について説明させていただきます。

(配布したチラシ、冊子等について説明)

次回の WG は年明けの 2 月上旬を予定している。今回のようにオンラインでの参加も含めて検討し、ご案内する。ワーキンググループの会合以外でも、個別に委員を訪問し、意見を伺いながら取組みを続けていきたい。これで第 11 回学校支援ワーキンググループを閉会する。